

英米文化の背景

英米人の迷信・俗信考 (19) IV 年中行事

—その8 クリスマス (キリスト降誕祭) (2)—

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2010年10月1日 受理)

はじめに

クリスマス (キリスト降誕祭) は、信徒の人々にとって最も大切な意義深い祝祭である。前号 (1) に続き今号 (2) では、クリスマスイブとクリスマス、及びそれに続く祭儀期間をも含め、古くからの諸習慣とそれにまつわる迷信・俗信の考察を試みたい。

1 クリスマスイブ Christmas Eve (12月24日)

かつてキリスト教が広まり、中世の時代になるとクリスマスイブには、聖書中の『アダムとイブ』の劇がよく上演されたものとされるが、今日ではこの習慣はまず見られない。イブの24日に関して、次のような諸点は今日にも伝えられている。

1) ユールログ Yule Log

非ケルト系民族は、かつて夏至と冬至を大切な行事としていたが、キリスト教はキリスト降誕祭をこの冬至に合致させて祝祭行事とした。夏至の屋外の大かがり火に対して、冬至の屋内での炉火にあたるものとして、クリスマスイブにはユールログ Yule Log と呼ばれる大きなまきを暖炉で燃やす。この大まきについては、古来多様な信がある。

- * 「大まきは購入したものではない。他人から譲り受けたり、自分で見つけたり、自分の土地にあるものなどがよい」とされる。
- * 「大まきの運び込みは、クリスマス前日になってからでなければならない。」
- * 「大まきに火をつけるのは夕暮れになってからであり、火をつけるには前年のまきの燃えさしを用いる」のが仕来たりとされる。

また、Charles Kightly, *Perpetual Almanack*, December 24 には次の記述が見られる。
 … it (The Yule Log) should then burn at least all night — or if possible throughout the coming Twelfth Days of Christmas — without going out, …¹⁾ つまり、かつては、

- * 「大まきに点火後は、それが消えないようにし、一晩中燃やし続けねばならない。できれば、クリスマス季節の12日間ずっと燃やし続けるのがよい」と言われた。
- * 「クリスマスイブの夕食中に、ユールログを動かしたり、火を掻き立ててはいけなし」とされる。

- * 「点火用として保存する燃えさしには、火難除けの霊力がある」と広く信じられる。
- * 「大まきの断片をベッドの下に入れておき、次のクリスマスに新たな大まきと一緒に燃やすとよい。こうすると家を火災から守ってくれる。」ベッドの下以外では、台所の天井等に吊るしておいたりもする。²⁾
- * 「クリスマスの燃え木はとっておき、十二夜 Twelfth Night (1月5日)に燃やすのがよい。」ヨークシア州その他での習慣とされる。

2) 飾り付けに関して

クリスマスイブには、英米のキリスト教徒の家庭では、クリスマスツリーをはじめ、ヒイラギ、キツタ、ヤドリギが飾り付けられる。特に、ヤドリギについては、前号 [2, 3, (c)]でも触れたとおり、その木の下では、男性は女性にキスをする特典が与えられる。次はこれに関する俗信で、前号に追加されるものである。

- * 「娘はヤドリギの下でキスをされると、大いに幸運に恵まれる」と広く信じられる。
- * 「ヤドリギの下でキスをされた娘は、その葉と実を取って寝室に行き、ドアに鍵をかけその実を飲み込む。葉には最愛の人の名前の頭文字を彫る。これをコルセットの内側に縫い込んで心臓の近くに位置するようにしておく。そうすれば葉がそこにある限り、恋人を縛りつけておくことができる」と言われる。ヨークシアに伝えられる。³⁾

3) ユールキャンドル Yule Candle

クリスマスイブにはユールキャンドル Yule Candle をともす習慣がある。

- * 「ユールキャンドルは、買うものではなく人からもらうものであり(商人からサービスでよくもらえる)、一晩中ともせるだけの大きいものがよい」とされる。ユールキャンドルは型詰めロウソク(大きな型に入れたもの)で、1本で赤いものがふつうとされるが、時に赤と青の1対のもの等もあり、たいいていはときわ木の枝で飾られている。

次は、それがテーブルにおかれた場合の *Dictionary of Superstitions* の記述である。

It (the Yule Candle) would be unlucky to light it before the time ...The candle must not be snuffed, and no one must move from the table, till supper be ended. ⁴⁾ つまり、

- * 「ユールキャンドルは、クリスマスイブ以前に火をつけると不吉である。ロウソクは芯を切って消してはならない。夕食が済むまでは、だれもそれをテーブルから移してはならない。」なお、「芯を芯切りばさみで切ると、幸運が失われる」と言われる。
- * 「ユールキャンドルの燃えカスは、ロウソクが燃え尽きるまでそのままにしておくのがよい」とされる。従って、ロウソクが吹き消されることもない。「就寝等でやむを得ず消すときには、火箸ではさんで消すのがよい」とされる。

イブの夜には窓辺に大きなロウソクをとともすことが多い。また、イブだけではなくクリスマス季節中には、ずっと窓辺にロウソクをともしたりする。窓辺にロウソクをとともす習

慣はドイツで始まったとされるが、広く一般に行われる。この習慣のいわれは、「幼子キリストの道しるべ」(candlelight led the infant Jesus through the darkness)⁵⁾とされる。

2 クリスマスイブに誕生する者

- * 「クリスマスイブに生まれた子は、生涯、幸運に恵まれる」と期待される。
- * 「クリスマスイブに生まれた者は、精霊(しょうりょう=死者の霊)に悩まされることがない」と言われる。

3 サンタクロース Santa Claus とそのルーツ

サンタクロース、別名クリスマス爺さん Father Christmas については、現在では一応の衣装やスタイル、またその行動がお決まりのものになっているが、以前にはいろいろな内容があったとされる。

イングランドのクリスマス爺さんは、遅くとも15世紀以来、この季節に人間の姿に変装して現れる魔力の持ち主として知られていた。これがクリスマスイブにトナカイのひくそりに乗って各家庭を訪ね、煙突から降りてきて暖炉の壁のところに吊るしてある子供たちの長靴下に贈り物を詰め込むという今日のサンタクロース像となったのは、多民族の伝説のつぼであるアメリカにおいてであった。

西欧諸国の多民族のサンタクロース伝説にはいろいろなものがあるとされるが、代表的なものの一つとして、4世紀の小アジアのミラ Myra の聖ニコラウス St. Nicholas の伝説が挙げられる。それによれば、聖ニコラウスは貧しい3人の姉妹に真夜中に気づかれないように持参金を贈り、女性たちが娼婦に身を落とさないで済むようにした。「その時聖人が姉妹の家の煙突に3枚のコインを投げ込んだところ、暖炉のそばに乾かしてあった複数の長靴下の中にそのコインがちゃんと納まった」⁶⁾と伝えられる。これが、長靴下にプレゼントが入られるいわれとされる。またこの聖人は、シントクラウス *Sinte Klaas* 爺さんとして、その祝日の12月6日にはオランダ系アメリカ人の子供たちの靴の中に贈り物を詰めて回ったと伝えられている。

また、この他のサンタクロースに関する伝説としては、ドイツ系アメリカ人たちの間に伝わるクリスクリングル *Krissskringle* がいる。彼はよい子には褒美を贈り、悪い子には罰を与えたと伝えられる。また、スカンディナヴィアまたはロシアの伝説では、北極に住む魔法使いが伝えられている。これらの多民族の諸伝説がアメリカで複合され、今日のサンタクロースが誕生したとされる。このサンタクロースの形像と内容は、1870年代に大西洋を渡り、元の古里であるヨーロッパに伝わっていった。⁷⁾

サンタクロースは、人々、特に子供たちにとってのクリスマスにおける一大「楽しみごと」であり、また、キリスト教徒のみならず、広く世界の人々に愛されるものになっている。

4 クリスマス料理

クリスマス料理については、長年のうちに種々の変遷が見られるようである。

1) 七面鳥 turkey

七面鳥は、今日のクリスマス料理の中心的な役割を持つ伝統料理である。実は、七面鳥は、イギリスでもエリザベス朝時代には既にクリスマス料理の一つになっていたが、それがガチョウ（鶩鳥）やニワトリ（鶏）や骨つきのローストビーフなどからその主役の座を奪ったのは割と最近になってからのこととされる。（かつては、クリスマスに不可欠の一番の料理とされたのはイノシシ（猪）の頭の料理であったが、これとその改良種と言われるオスブタ（雄豚）の料理も、ともにクリスマスの食卓から姿を消してしまっている。）⁸⁾

2) クリスマスプディング Christmas pudding

かつて人々に愛好されたクリスマス料理に、プラムポリッジ plum porridge がある。これは牛肉と干しブドウと乾燥したセイヨウスモモを入れた一種のかゆであったが、これが19世紀初期には固形にされ、クリスマスプディングができ上がっていた。今日でも、家庭ではこれをかき混ぜの主日 Stir-up Sunday に作り、その中に「幸運をもたらす」とされる銀貨やお守りの小物を入れる慣習がある。⁹⁾

* 「クリスマスプディングは、幸運を呼ぶために家中の皆がかき混ぜねばならない。」

* 「かき混ぜながら、月別の願い事を唱えたと叶えられる。」また、「一心に願い事を唱え、3度容器の底が見えるまでかき混ぜるとよい」とも言われる。¹⁰⁾

* 「妙齢の娘たちは、もしも12カ月以内に結婚したいと望むなら、かき混ぜの手伝いをしなければならぬ」とも言われる。¹¹⁾

3) ミンスパイ mince pie

伝統的な料理ミンスパイは、羊肉等のこま切れ肉 mince meat にオレンジ、イチジク、ナツメヤシ等の果物やスパイスを混ぜ合わせて焼いたものを小麦粉の生地に入れて、（キリスト誕生の関わりから）飼い葉桶をかたどった形に焼きあげたものである。そのため、一時期にはピューリタンから、偶像崇拝的な風習として非難されたりもした。

* 「別々の人によって作られたミンスパイには、翌年1年間に1か月分の幸運をもたらす不思議な力がある。」¹²⁾ 今日でも、各家庭同士でミンスパイを交換し合ったりする。

なお、パイに関しては、古い時代にはヨークシアクリスマスパイ Yorkshire Christmas pie などもあったとされる。これはガチョウ、野ウサギ、ガン、カモなどの肉を多量に入れて焼き上げた大きなパイであったが、姿を消してしまってから久しい。

4) クリスマスケーキ Christmas cake

* 「クリスマスケーキはイブに食されるが、一部はクリスマスの日までとっておかれる。」

リンカーンシア州などでは、「これを破ると次の年は不運の年になる」と言われる。

5 クリスマスイブとクリスマス早朝における教会行事

クリスマスイブの教会行事として挙げられるものには、次のようなものがある。

1) 深夜ミサ Midnight Mass

キリスト教徒にとっては、厳密な意味では、クリスマスはクリスマスイブから始まると考えられている。その点から、キリスト教徒の多くは教会の深夜ミサに出かける。実は今日では、1年に1度このミサだけに出席する者さえいるとも言われ、各地の教会は人々で溢れんばかりとなる。深夜ミサはもともとローマカトリック教会の聖体祭儀であったが、これが今日のように教派を問わず各地の教会で盛んに行われるようになったのは、第2次世界大戦以降だとされる。¹³⁾ このミサでは、教会にクリブ crib (飼い葉桶・まぐさ桶)の模造品が飾り付けられるが、これはキリストがベツレヘム Bethlehem の馬小屋の飼い葉桶で誕生したと伝えられることから、その場を想像しての飾り付けである。この習慣もとはローマカトリック教会が始めたとされるが、現在では多くの教派の教会でこれが飾り付けられる。この飾り付けは家庭でも、商店でも、また公共施設や学校でもなされる。学校ではその飾り付けの前で、子供たちによるキリスト降誕劇が演じられたりする。

2) クリスマス早朝の礼拝式 Christmas Morning Service

特にプロテスタントの人々には、クリスマスの朝に高らかに鳴り響く鐘の音とともに行われる朝の礼拝式 Christmas Morning Service に出席する者が多いとされる。

3) 悪魔のための弔鐘 Tolling the Devil's Knell

深夜ミサでの祈りのあとやクリスマスの朝には、次のようなことが言われる。

* 「クリスマスを迎える時、教会でのお祈りの後では、魔女や悪霊などの害を受けることはあり得ない。」 W. Shakespeare, *Hamlet* には、これに関連する次の記述が見られる。

Some say that ever 'gainst that season comes / Wherein our Saviour's birth is celebrated, / This bird of dawning singeth all night long ; / And then, they say, no spirit dare stir abroad, / The nights are wholesome, then no planets strike, / No fairy takes, nor witch hath power to charm, / So hallow'd and so gracious is that time. ¹⁴⁾

(救い主キリストのご降誕が祝われる季節がくると決まって、夜明けを告げるあの鳥が夜通し鳴き続けるそうである。すると、妖魔は1歩も出歩くことができない。夜の世界は浄化され、星も妖気を発せず、妖精も力なく、魔女も魔力をなくする。それほどにこの季節は清らかで汚れがないと言われる。)

これに関連して、Kightly は「悪魔のための弔鐘」“Tolling the Devil’s Knell”という特別な行事について触れている。これはクリスマスイブにデューズベリー Dewsburry のオール・セイントス All Saints 教会でのみ古くから行われている行事である。イブの10時頃から1組の鐘のうち最低音の鐘 tenor を鳴らし始め、キリスト生誕の年数と同じ数だけ鳴らし続ける。その間、最後の鐘の音が、ちょうど真夜中から鳴らし始める組み鐘 chime の最初の音とぴったり一致するように慎重に間合いがとられる。こうして真夜中に、キリストの降誕と悪魔の死が同時に告げられる。このことは次の信となっている。

* 「悪魔のための弔鐘行事を怠っては、向こう1年間悪魔が教区内を横行して災禍を振りまく。」かつての住民の信として、今日に伝承されている。¹⁵⁾

6 クリスマス Christmas Day (12月25日)

いよいよクリスマスの日となり、その朝戸を開けることに関して次の信がある。

* 「クリスマスに、家のドアを開ける最初の人は幸運に恵まれる」と言われる。その時、サセックス州の一部では、「ようこそ、サンタクロース!」と言う習慣がある。

* 「クリスマスの朝、下に降りる最初の者はホウキをもって、表玄関のドアを広く開け、敷居から「厄」を掃き出す。」これも同様にサセックス州の信である。

クリスマスの日には、古来人々は「仕事をしない」のが一般的な習慣である。

* 「クリスマスの日、及びクリスマス期には、避けられない仕事、例えば家畜の養育などを除いて、耕作にせよ、その他の労働にせよ、いっさいしないもの」とされる。

1) クリスマス祝祭 Christmas Festival

この日の教会行事としては、クリスマス祝祭 Christmas Festival があり、これに出席する人々も多い。この祝祭では、この日に相応しい9つの聖書日課 nine scriptural lessons の朗読がなされる。またその間には、キャロル (祝歌) Christmas Carol が歌われる。

2) キャロル (祝歌) Christmas Carol

キャロルの歴史は、一般的には13世紀にさかのぼると考えられている。キャロルは、もとはキリストの降誕や宗教的テーマとは関係なく、庶民の踊りといっしょに歌われていた世俗的な歌であったとされる。その特徴としては、折り返し句が1句ごとに反復される形式が多い。今日よく知られているものとしては、‘O Come All Ye Faithful’ ‘Hark the Herald Angels’ ‘Once in Royal David’s City’ ‘Good King Wenceslas’ ‘O Little Town of Bethlehem’ 等があるが、この大半はヴィクトリア朝時代に作られたとされる。¹⁶⁾

7 エリザベス女王のメッセージ

今日イギリスでは、クリスマスデイにはエリザベス女王 Queen Elizabeth のメッセージ

を静かに聴く家庭が多いと言われる。この伝統はかつて1932のジョージ5世 George V のときに始まったもので、1956年以降はテレビを通して行われている。

8 クリスマスに誕生する者

クリスマスデイに誕生する者については、次のような信がある。

* 「クリスマスデイが日曜日なら、その子は偉大な主君になり、月曜日なら永遠に強く賢明に、火曜日なら自分が強くて貪欲になると分かり、水曜日なら勇猛で快活に、木曜日なら十分栄える幸せな権利を持ち、行為は善良でぐらつかず弁舌は賢明で分別があり、金曜日なら長生きで眼が好色に、土曜日なら間違いなく半年以内に死ぬであろう。」¹⁷⁾

この信では、土曜生まれが格別に不運な内容になっている。

* 「クリスマスの日に生まれるような幸運な人は、生涯、亡霊に悩まされることはない。」

* 「クリスマスの日に生まれると、溺れることも絞首刑にされることもない」と言われる。

9 残りのクリスマス季節

キリスト降誕祭が終わると、残るクリスマス季節を手持ちぶさたに過ごす人が少なくないようである。この理由としては、クリスマス後の12日間に往時行われていた教会や世俗の行事の多くが廃れてしまったことが考えられる。例えば、クリスマスの翌日(26日)の聖ステパノ St. Stephen の祝日に、かつてのように貧しい隣人たちへの施しや、各家庭で使用人、郵便集配人、清掃業の人等に祝儀の贈り物をする習慣(クリスマスの贈り物日 Christmas Boxing Day と称される習慣)もほとんどなくなっているとみられる。

28日は聖嬰兒日 Childermas である。雇い主の中にはこの日の出勤を命じる者もあるかもしれないが、一般にこれは人々に好まれない。この日はヘロデ王 Herod に殺害された罪なき幼児たち Holy Innocents を記念する日であり、1年中で最も不吉な日とされる。

* 「聖嬰兒日に物事を始めると、恐ろしい厄難に遭う」と言われる。

クリスマス休暇はたいいてい新年まで続く。中にはごく少数と考えられるが、伝統的なクリスマス季節の最終日に当たる十二日節 Twelfth Day (1月6日) までか、あるいはその後の月曜日の耕作初めの日 Plough Monday まで休暇を楽しむ人々も見られる。

10 飾り付けの片付け

* 「クリスマスの飾り付けに使ったときわ木やツタは、家畜、特に乳牛に食べさせるとよい」と信じられている。「これらは農場に幸をもたらす」と今も一部に伝えられている。

* 「教会に飾られていたヒイラギの枝やツタは家に持ち帰るとよい。特に液果のついたヒイラギの枝を家に吊るしておくで、必ず幸運な年がやってくる」と言われる。

教会であれ、家であれ、クリスマスツリーやその他の飾り付けを取り外す時期については、今日では、一応次のように言われている。

- * 「クリスマスの飾り付けの取り外しは、十二日節 Twelfth Day (1月6日)の前日、つまり十二夜 Twelfth Night (1月5日)にするのがよい。」しかしながら、今日では必ずしもこれが守られているとは限らない(特に、商業関係者の間ではそうである)。飾り付けの取り外し時期については、かつては、一般に次のように言われた。
 - * 「クリスマスの飾り付けは聖燭節 Candlemas (2月2日)に取り外すもの」とされた。また、さらにウェイルズ各地やイングランド西部のカトリック教徒たちの間では、
 - * 「取り外した飾り付けは懺悔火曜日 Shrove Tuesday (Ash Wednesdayの前日)までとっておき、これを燃やして、その上でパンケーキを焼くとよい」¹⁸⁾ と言われ、今も一部に残っているようである。
- このときの片付け状態、特に教会の信徒席の片付け状態に関して次の信がある。
- * 「教会のクリスマスの飾り付けは聖燭節前にきれいに片付けられるべきであるが、特に葉や液果が残る信徒席を占める家族には、その年死者が出る」¹⁹⁾ とされた。次はこのことを強く信じる人物についての、R. チェインバーズ『日々の書』(1864)の記述である。

An old lady ... whom I know, was so persuaded of the truth of this superstition, that she ... used to send her servant on Candlemas-eve to see that her own seat at anyrate was thoroughly freed from danger.²⁰⁾

(私の知っている…ある老婦人は、この俗信の真実性を大変に確信していたので、彼女は聖燭節前夜にいつも彼女の召使を送り、ともかくも彼女自身の席が完全に危険から免れるように調べさせたものであった。)

クリスマスの飾り付けの処理については、焼くか焼かないかの大きな相違点がある。

- * 「クリスマスの飾り付けは焼くものである」という考え方がまずある。次はこれに関する Thomas Hardy の記述である。

... we were burning the holly / On Twelfth Night ; the holly, /
As people do : the holly, / Ivy, and mistletoe.²¹⁾

(…私たちはヒイラギの枝を焼いていた / 十二夜に、ヒイラギの枝を、/
人々がするように、ヒイラギの枝、ノツタ、ヤドリギを(焼いた)。)

なお、飾り付けが翌年のクリスマスに焼かれる習慣もある。次はそれに絡む俗信である。

- * 「クリスマスのヤドリギの飾り付けは、しばしば次のクリスマスまでとっておかれ燃やされるが、未婚の娘たちは、その際のヤドリギの燃え方で未来の夫を占った。静かな炎はよいしるしであり、パチパチはねると不機嫌で怒りっぽい夫をもつことになる前兆とされた。」ウスターシアの伝承である。²²⁾

ところが一方では、飾り付けを焼いてはいけないとする、全くもって逆の習慣もある。
 * 「クリスマスの飾りつけを焼くのは不吉である。絶対に焼いてはいけない。焼けば次の
 12カ月の間に家から死者が出る」とも言われる。この習慣は、シュールズベリー、ル
 イトン、フォード、ワーゼン、モントゴメリーシア州南東部やその他で見られる。²³⁾
 古くからこれら両方の相反する習慣があり、それぞれの習慣が今日にも続いている。

[以上で、IV 年中行事 終わり。]

Acknowledgements:

貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 氏 (元、中国短大講師) に、感謝申し上げます。

Notes:

- 1) "December 24," *The Perpetual Almanack of Folklore*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1987).
- 2) "Christmas Log / Ashen Faggot: piece kept for luck / protection," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP, 1990).
- 3) "Mistletoe, kissing under: divination / spell," Opie & Tatem.
- 4) "Christmas Candle, 1817," Opie & Tatem.
- 5) "Candle," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 52 (L).
- 6) "Christmas," Pickering, 64 (L)-(R).
 St. Nicholas tossed three coins down the chimney of the house... : the coins fell neatly into some stockings that were drying by the hearth.
- 7) "Christmas," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986) 75 (L).
- 8) "Christmas," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 75 (L).
- 9) "Christmas," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 75 (L).
- 10) "Christmas Pudding, stirring, 1905," Opie & Tatem.
- 11) "Christmas Pudding, stirring, 1888," Opie & Tatem.
- 12) "Christmas," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 75 (R).
- 13) "Christmas," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 74 (R).
- 14) William Shakespeare, *Hamlet*, I-1,163-169 (The Arden Shakespeare, ed. Harold Jenkins (1982; New York: Methuen & Co. Ltd. paperback, repr. 1994).
- 15) "Tolling the Devil's Knell," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 219.
- 16) "Christmas," Kightly, *The Customs and Ceremonies of Britain*, 74 (R).
- 17) "Christmas, born at," Opie & Tatem.
- 18) "Christmas Decorations, (evergreens) : burning on Shrove Tuesday," Opie & Tatem.
- 19) "Christmas Day," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1969) 74.
- 20) "July 13, Superstitions, Sayings, &c., Concerning Death," *The Book of Days, A Miscellany of Popular Antiquities in Connection with The Calendar ...*, ed. R. Chambers (London: W. & R. Chambers, 1864) 53 (L).
- 21) Thomas Hardy, *Winter Words in Various Moods and Metres*, "Burning The Holly," (London: Macmillan and Co. Ltd. 1928) 121.
- 22) "Mistletoe, kissing under: divination / spell, 1961," Opie & Tatem.
- 23) "Christmas Decorations, (evergreens) : burning, 1883," Opie & Tatem.

Speculation concerning Superstitions in the Cultural
Background of the English & the Americans— (19)
IV The Year's Celebrations Part 8:
On the Customs and Superstitions of Christmas (2)

Kunihiro FUJITAKA

*College of Science and Industrial Technology,
Kurashiki University of Science and the Arts,*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2010)

Christmas, the commemoration of the birth of Jesus Christ, is one of the most celebrated of Christian holidays. Christians around the world celebrate a variety of events both joyous, such as Christmas feasts, and sober, like attending Christmas church service.

This paper, which continues the author's previous investigation, examines the traditional customs, including modern celebrations, during the Christmas festivity season from Christmas Eve and Christmas Day to the final Twelfth Day. Additionally, we would like to speculate on a number of superstitions that are observed within the Christmas period.

In this way, we hope to convey a better understanding of the affection with which Christmas has long been respected and enjoyed, along with the cultural background of this most cherished occasion among the English and American population.

[This is the final number of "IV The Year's Celebrations."]